

林徳寺だより 第二号

無量壽

平成14年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

林徳寺の歴史 ②

第1号（平成13年8月13日発行）から続く

当時は現在の阿賀野川の中州付近は陸地であり、そこに寺地があつた。平成10年5月に阿賀野川の川底から多くの樹木が引き上げられた。これが2代真谷正誓の建立した最初の林徳寺境内の名残と考えられている。



阿賀野川から
引き上げられた大木

左から
高橋さん(新岡山) 岡田さん(江口)
前住職 前坊守

また、記録によれば林徳寺開基以来の門徒として、

田辺 安左エ門、野崎 治左エ門、
三原 六左エ門、大沢 藤兵衛

小熊 喜之七、
岡田 与左エ門、
深沢 権左エ門、
などの名前が見える。

その後、3代玄寛、4代円寛、5代利玄、6代覚乗、7代恵海と林徳寺歴代住職の努力により、林徳寺の基礎が築かれた。

6代覚乗は若くして京に上り、修学して、律師の位を授けられた学僧であつた。またこの覚乗の時代に、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅の途中、当山に立ち寄つたと伝えられている。

7代恵海の代に当たる正徳4年(1714)には、曾根の野崎家より梵鐘が寄進された。大変良い音色の鐘であつたと言うが、残念ながらこの梵鐘は太平洋戦争中に供出され現存しない。

その後、川の氾濫により川筋が変化し、それに伴つて享保年間(1716~1735)に一度江口村高見小路に移転、寛政元年(1789)にさらに現在地に移転した。

11代乗山は、過去2回にわたる移転によつて損傷はなはだしくなつた本堂の新築をこころざし、寛政8年に完成させた。

この本堂は、現在の新潟市本所にある真宗大谷派 光桂寺様と同じ本堂を、同じ大工の棟梁が建てたものであつた。

ところが享和2年(1802)、火事のため、新築されたばかりの本堂・庫裏のすべてが

焼失してしまつた。そのため、本尊、過去帳などはすべて失われたが、開基仏のみは法要のためご門徒のお宅（現在の豊栄市早通り 佐藤家）にあり無事であつた。

文化10年(1813)に現在の本堂が再建された。これは、将来本格的な本堂を再建するまでの仮本堂として建てられたと言ひ伝えられている。しかし、仮本堂とは思えないほどの建物であり、現在まで200年近い年月を経ているが立派に林徳寺本堂としての役割を果たしている。この再建事業には、三百地の佐藤忠次郎家から多大の支援を受けた。

その後12代乗空は、嘉永4年(1851)本堂裏に保存されていた五尊（阿弥陀如来木像、宗祖聖人・蓮如上人・聖徳太子・七高僧の絵像）の灰を山門近くに埋めて石碑を建てた。これが今に残る五尊灰燼塚である。

続く



関東ご旧跡 林徳寺団体旅行のご案内

- ・期 日 平成14年5月23日(木)～25日(土)
- ・代 金 一人 65,000円
- ・募集人員 70名
- ・主な参拝地

たかださんせんじゆじ
①高田山専修寺 (栃木県芳賀郡二宮町高田)

親鸞上人が創建した唯一の寺で、浄土真宗発祥の根本大道場。

専修寺には、国や県の重要文化財である御影堂や如来堂、楼門、総門、一光三尊仏、親鸞聖人像などがあり、国からは「親鸞聖人の宗教遺跡」として認められています。近くには、専修寺建設中に親鸞聖人が住んでいたという三谷草庵もあります。



べっかくほんざんいなだごぼうさいねんじ
②別格本山稲田御坊西念寺 (茨城県笠間市稲田)

布教生活の根拠地 「聖人越後の国より常陸の国・笠間の郡・稲田郷というところに隠居したもう」(御伝抄)とある稲田山は親鸞一家が、常陸の国布教の本拠地としてほぼ20年間過ごしたとされる所です。また、親鸞聖人が浄土真宗の根本聖典『教行信証』をまとめたところとして重要な場所です。

有名な『弼七同行』 稲田山での親鸞のエピソードです。稲田から三里の福田というところに、極貧の弼七夫婦がいました。彼らは無二の信者でしたが、一枚の外出着しかもたず、交互に参拝するより方法がありませんでした。

ある日、一日でも聖人の教えを聞き逃すことは大変な損害と考えた二人は、裸同然の女房をつづらの中に入れ、弼七がそれを背負って聖人の教えを聞いていました。

ところが、つづらの中に隠れ潜んでいた女房は「教え」の有難さに歓喜念仏して、外に踊り出てしまったのです。参詣者はどっと大笑い。これを見た聖人は『鎮まりなさい。お浄土参りの道には、賢ぶったり善人ぶったりする必要はありません。外をいかに美しく飾ろうと、心に真実がなくては何もなりません。皆は弼七の妻こそお手本になされるがよい』と女房をほめたのです。浄土真宗の教えと、人間親鸞を彷彿とさせる話ではないでしょうか。



- ・申込み 平成14年1月31日までに、申込金10,000円を添えて、林徳寺までお申込みください。

詳細は、別紙申込み用紙が有りますので、お申し出下さい。

《極楽・往生》

「極楽」は、阿弥陀仏の浄土(仏国土)である。西方十万億土の彼方にあるとされる。文字通りに「極めて楽しみが多い世界」である。食べる物や着る物の心配がないというような物質的な楽しみばかりでなく、阿弥陀仏の教えをいつでも聴聞できると言う喜びもある。

その極楽世界に往(ゆ)き生まれることを「往生」と言う。したがって、往生は死後のもので、そこから死ぬ事までも「往生」と呼ばれるようになった。進退窮まりどうにも困ったようなときにも「往生する」と言う。一般に余り良い意味に使われない言葉であるが、やはり「死」のイメージにつながった言葉だからであろうか。

この「極楽往生」をするにはどうすればよいか。簡単である。ただひたすらに阿弥陀仏の救済を信じて「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えれば良い。それが浄土教の教えである。日本仏教では、平安時代の末頃からこの浄土教の信仰が盛んになり、「極楽往生」への憧れが人々の間に定着した。

『日本語になった仏教の言葉』 ひろこちや

日本語になった仏教の言葉 ②